

Scene  
Vol.12

# オートプシー・イメージング(Ai)

## 第七弾 多死社会の到来で多様化するニーズに対応する Aiの最前線

企画協力：塩谷清司 聖隷富士病院診療部放射線科部長

わが国はすでに、超高齢社会が進むとともに死亡者数が急増する、いわゆる多死社会に突入しています。社会環境の変化により孤独死などの増加も予想されており、社会インフラの一つであるオートプシー・イメージング(Ai)へのニーズは、今後ますます多様化しつつ、高まっていくと考えられます。そこで、Ai特集第七弾では、「多死社会の到来で多様化するニーズに対応するAiの最前線」をテーマに掲げ、多死社会の中で求められるAiの役割と学際的展開を踏まえ、救急医学や病理学、地域医療についても焦点を当てました。本特集を通じ、Aiの最新動向をとらえ、今後を展望します。

シリーズ特集 シーン別画像診断のいま——社会的要求への対応と課題

オートプシー・イメージング(Ai) 第七弾：多死社会の到来で多様化するニーズに対応するAiの最前線

Scene  
Vol.12

### I 多死社会の到来とAiの活用・役割

## 1. 総論 ——多様化するニーズに対応するAiの展望

山本 正二 一般財団法人Ai情報センター代表理事

多死社会とは、高齢化社会の次に訪れるであろうと想定されている社会の形態であり、人口の大部分を占めている高齢者が、平均寿命などといった死亡する可能性の高い年齢に達するとともに死亡していき、人口が減少していくであろうという時期と定義できるだろう。

合計特殊出生率も、2005年の1.26を底に緩やかな回復傾向にあるが、2016年は1.44と低いままで、出生数が97万6979人と初めて100万人を割った。今後も人口減少は続くだろう。逆に、2015年の死亡数は、戦後最多の130万7765人となっており、2038年には年間死亡数170万人、

仮に出生数が今のまま下がらないとしても、毎年50万都市が一つずつ消滅していく計算になってしまう(図1)。

わが国のオートプシー・イメージング(以下、Ai)は、2012年9月の「死因究明等の推進に関する法律」の施行、2014年の「死因究明等推進計画」の閣議決定により本格的な広がりを見せ、また、「警察等が取り扱う死体の死因又は身元の調査等に関する法律」の施行により、異状死などの死因究明に欠くことのできないものとなっている。さらに、その後施行された「小児死亡事例に対する死亡時画像診断モデル事業」や、「医療事故調査制度」において

もAiは重要な位置づけにあり、現在では社会インフラの一つになったと言える。一方、わが国は、今後高齢化がますます進むとともに、死亡者数が急増するいわゆる多死社会に突入しつつある。社会環境の変化により、孤独死などの増加も予想されており、今後Aiへのニーズがますます多様化し、高まっていくものと考えられる。

そこで、今回の特集では、多死社会を迎える中で、今後求められる学際的な展開を踏まえ、救急医学や病理学、地域医療とAiについても焦点を当て、多様化するニーズに対応するAiの最新動向をとらえ、今後を展望したい。